のだろう。わが家ではよくオジヤをつくった。
朝食の残りを味噌汁に入れて、竈にかけ、薪をたいて、木の蓋の鉄鍋でつくる。中に油揚げがあるときは、最高の味だ。
親父手作りの、年輪が大きく渦巻いた飯台の中央に、わらで作った鍋敷を置き、その上に大鍋をのせ、帆立貝で作った貝杓子ですくうオジヤの夕食、夕クアンのお漬で腹一ぱい。
破れ障子の寒の風も、しばし忘れる。

(三) かみなり

これは神野家の独得のものかも知れない。ケンチン汁に似ているがちょっとちがう。大根・人参・牛蒡・里芋などを主とするも、最後に豆腐を入れる。その豆腐は角切りで切るのではなく、手でぐしゃぐしゃにちぎるようにして入れる。そしてゴマ油をたらす。これも木の蓋の鉄鍋、薪でたく。コクのある料理、冬の寒さから守ろうとする生活の知恵である。
生活の知恵といえば、牛の脂だ。野村肉店から牛の脂をただで貰う。これをフライパンでやいて油をとり、それをヒビ・アカギレの手足に塗ったものである。

(つづく)

(編集子いう)
こんな郷愁をそそる話が、八十回ほど続く。文章簡潔、余韻に富み、忘れがちなおふくろの味が、漠然と思い出される。今はないおふくろ、遠くかってしまった幼少の日々、忘れがちになっているふるさと、八の思慕、人々はそれを笑ってはなんない。神野氏は四年前にこれをまとめられている。今年中毎号掲載の予定、ご愛読を乞う。

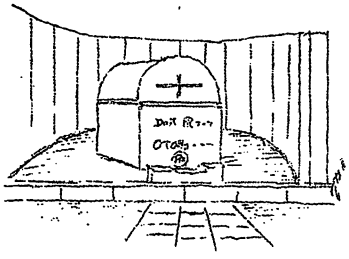
記録

早春の現地研修

(一) 新春初歩きで津久見市へ

まず一月二日、恒例の年頭初歩き、津久見行きを明日に変更したが、行届かない点があり、定刻前佐伯駅に出かけ、集まられた官・有松山野内三会員にお引とり願う。臼杵の民謡会員にも無駄、ごめいわくをおかけした。おわび申します。
一月三日(火曜) 寒風が吹きすさび、肩すくむ日であったが高木会長以下十二名参加、十時半津久見駅下車したが、降久見市役所ご勤務の新名俊秀会員が出迎え下さり、そのご案内で大友宗麟公の墓所を訪ねた。以前の墓が粗末な墓であったのをなげいて、大友宗麟公顕彰会(会長上田保)が、総額二千万円を越す工費をかけて、昨年十月二日に竣工したものである。キリシタン大名宗麟公には、まことに似つかわしいもので、墓石はイタリー産の白大理石、蕃鉢型の壮麗なもので、墓石の正面には十字架が大きく刻まれ、その下にローマ字で
ドン フランシスコ 大友宗麟
と刻まれてある。

大友宗麟公の墓



では、古い墓はどうなっているかと見れば、古手程よい位置に移築してあるが、これは仏教様式のかなり大きなものである。
さらに少しはなれた入口すぐ右手に、日名子実三作の「大友宗麟公像」のブロンズ像が立っている。大分の春日浦と同じ像だが、こちらは台座の上一メートルほどの小さなものである。
その横に大理石に刻まれた墓碑の碑文がある。古ようど清田会長氏、一洗車早く来て、寒風吹きすさぶ中で拓本にとってい

たが、其の夜最初に書かれている宗麟公の誕生のところ、

「大友宗麟は永禄三年（一五三〇年）府内（大分市）の大友館に生まれ」

とある永禄は、明らかに享禄の誤りであると通報があった。昨年十月二日竣工式に配布のプリントも誤っている。

なおついでに、天正十年にローマに派遣された少年使節のことは、大友宗麟は全然関知していないとされている。（渡辺世祐「大分県の歴史」参照のこと）これはすでに定説であるのに、どうしてこのような誤りを重ねたものか。惜しまれることである。

私たちは、ここを後にして歩いて西教寺に向った。途中、津久見高校に立寄り、玄関先の植込みの中にある教基の記念碑を見た。いずれも同校が全国高校野球に連続出場し、遂に優勝した不滅の成績をたたえたものである。

西教寺は真宗のお寺である。そして明治の初年、秋月橋門先生の弟二子（女）が嫁入された寺である。しかも当主で隠家厳正道師は、わが佐伯史談会に先年来入会下さっている。そこで甘えて今日の昼食場としてお願いしていた。

快くお迎えをいただき、和楽談笑を交えてちょうど刻限の昼食をすませる。

旧藩の頃は、青江は臼杵藩領であったが、津久見側はすべて佐伯藩領であった。だから旧臼杵市・旧四浦村とも、すべて佐伯藩毛利の支配するところで、毛利高政が出した「勧農の紙書」が、赤嶺社の西郷社家にあるのは、決して不思議でない。

食後の話合いの時間に、私（用祭）は、橋門が嫁入る刀自に寄いて与えた五つの戒めを披露した。その全文はこうである。（現在は東京の山口貞夫家にある。特参は秋月琦次氏よりのコピー）

戒

一 舅姑の命いささかもそむくべからず。

一 常にわさわさとして腹立つるなかれ。

一 伴僧・婢僕の類とは一言半句の戯れもいふべからず。

一 表にたゝぬうそたゝとも うそはいふべからず。

一 貞節の道は今更いふに及ばず。然れども わすれぬよう、かねて読たる女大学等の本文を念ふべし。

明治三年三月十四日

橋門老爺

（注）変体仮名は普通仮名になおし、句読点は編集者がうった。しかし振仮名は原文のままである。

この五つの戒めは、橋門先生の文性愛がにじみ出ているので複製を頼つことを約束し、尚直川の山下・小野の両氏は「女大学」のプリントも今日の参会者に配ることを約束し、その二つの約束は一月十六日の役員会で果たされた。

午後一時半になったので一同は西教寺を辞して駅に向った。途中赤八幡社に参拝、すばらしい建築の神門（楼門）を仰ぎ見た。外にこんな楼門をもつ神社は、佐伯地方には全くない。仏寺には大なり小なり山門があるが、それとて比べものにならない。特に彫刻がすぐれている。

次の日であったか、同行の水野善助会員から電話があり、その彫刻は弥生町石丸の黒水徳次郎（故人）の手になるもので、外にも方々に名作をのこしている——という。これは面白い。かくれた郷土の芸術家のことを追求して見ようということになって、その発展が次の二つである。全く知らなかった堂宮の彫物師のかの人の跡を尋ねさがすことになった。

時間が少しあったので、駅の近くのウバメガシの巨樹を見る。これは大分県指定の天然記念物で、「鬼瓦」という地区名もこの老木によるものであること勿論である。

僅かな時間であったが、正月の初歩きとはこんなもので、しかも次々と発展して研修がつづけられるのがよい。一行はそれでも僅かに疲れを感じながら、二時三十八分の下りで佐伯に帰った。ただし熱心家の清田会員は、青江の解脱閣寺の仏足石を拓本にとりに出かけた。

㊂ 一月廿八日 蔵野から井崎へ

一月十六日の年度初めの役員会をすました後、木村善助会員の進寂熱心に促されたかっこうで、数人の自転車隊はいざ越えを越して、まず竹の峯部落にはいる。史談会としては、ここは二度目であった。

まず公民館で仏具青銅製の鑵（ケイス）子を見る。直径31cm、高さ24cmほどの鉦で、その上の縁に「安永四年五月吉日」の文字があり、当時ここに庵寺があったのではないかと考えられた。

それから山際の墓地の一角に、上図のような庚申塔群があり、その右にこれは珍らしい、板碑で下部に二体の仏像が刻んである。

このあたり村の入口でもないし、どんな意味の庚申塔だろうか。一基に「安永七年」の文字があるので、いずれにしても江戸時代中期のものであろう。

さて、一行八名（高木・木村・関田・小野・山本・羽柴・塩月・岩田）は、石丸の後藤慶馬氏邸を訪う。この屋敷が以前の黒木徳次郎氏（故人）の居宅であったところ、庭先の木々がかつての面影を伝えているという。（畑木で理髪店を営んでいる養蚕家を後から訪ねることにして、そのまま辞去する）

道は国道に出ずに、集落の中のまがりくねった狭い道を自転車で行く。途中、留田のとある家の背戸山で、一石五輪塔一基と板碑二基を見る。すでに益田先生の調査済みかもしれぬ由。

小野会員の宅に招ぜられるままに立ち寄り、お茶をよばれる。蒐集になる城郭関係の図書や絵図が、次々にひろげられる。私は床の上に掲げられている三浦梅園の横額を読む。（字しそこなったか知ら）

義公愛禅寂　結宇倚空林　戸外一峰秀　階前衆壑深
夕陽連両足　空翠落庭陰　看取蓮花浄　方知不深心

哲学者梅園らしい書であると見た。

小野家を辞去して、すぐ後の川俣寺址、妙見社、天神社などめぐって、杉林の中の巨大な五輪塔群を見てまわる。宝筐印塔の一部も散在していて、数百年前正面の梅年礼城の重要な集落であったことが思われる。

それから一行は畑木に出て黒木理髪店を訪ね、養蚕家羽柴氏から、大いに承わる。

今日の探訪の眼目は、昔の流れの中に忘れ去られようとしている、村の彫物師黒木徳次郎の業績である。今日はその作品はついに一点も見ることを得なかった。黒木氏は位牌を出して見せて下さった。

萬徳院釈成道大居士　昭和十五年四月五日没　八十五歳

もう亡くなって四十年近くなる。故人を知っていた人も次々と亡くなって、その住んでいた屋敷も今は人が変っている。人生は短かい、とはいえ八十五歳の長命でも。しかし芸術は長い。黒木徳次郎の作品は今次のような所に残っていて、火事に焼けない限りいつまでも長く残ることであろう。

○ 草久見市　赤八幡社　楼門の彫刻
○ 佐伯市古市　香嶋銀一家　仏壇の欄間
○ 南海部郡本匠村笠掛　福圓寺本堂及び山門

この外にもあちこちにまだたくさん埋れている筈、心がけて発見につとめようではないか。

㊃ 福圓寺を訪う

二月四日の午後、数名の会員はバスで本匠村笠掛の福圓寺に出かけた。言わずと知れた黒木徳次郎の彫物を観

るためである。ご隠家江藤義光師はここふよくお迎え下さって、予期していなかった数々のものを深んだ。

まず唐破風の珍らしい山門、これに鶴が二羽虚空と舞っている。黒木徳次郎の彫ったものである。

つづいて本堂入口の虹梁、その上の龍の彫物、木鼻、本堂とつなぐ海老虹梁、到るところに組んである斗栱、内陣にかけてあちこちに刻み出されている組物、すべて黒木が明治三十一年から三十四年にかけて二年四か月、泊り込みで取り組んだもの、その時徳次郎は三十三、四歳の働きざかり、それが二年有余家からはなれて、この仕事に没頭したのであった。

筆者はかような工芸にうといので、とり上げ方が適切でないかも知れない。ご隠家のお話をききながら、私は壮年の日にこれほどの制作を残した徳次郎が、必ずやあちらの神社、こちらのお寺で、次々とこのような彫物を手がけているに違いないと思った。

やって来た甲斐があった。

ご隠家は私共を座敷に導き、暖かいおもてなしであったが、その間も福田寺の古市からの移築のこと（明治十一年）など話される。古市からの解体移築で、道路の通通していなかった時代、長崎峠をすべて人々の肩でかつぎ越した苦労の程が思われる。

ご隠家は更に多年収蔵の陶器も見せて下さる。永楽志徐とか李朝の油壺とか、古清水、古伊万里とか、たまたま大阪から帰郷参会の本会顧問矢田清氏の鑑賞批評も加わり、思いがけない勉強が出来た。しかしこれらは今日の予定の外である。

バス停までの時間も楽しかった。次々と研修が展開して、今年は年頭初歩きを振り出しに、きわめて効果的に事が運んだ。

この次は梅牟礼城の出城（砦）の踏査、別項の通りである。冬枯れの野や山は、踏査に最高の時節である。足腰もきたえなくては。積極的にとり組もうではないか。

（羽柴）

報告

依伯史談会昨年のうごき

(一) 昭和五十二年度事業実績（主要なもの）

○研究集会　一月　弥生集会　井上十三郎氏講演会（協力参加）

二月　文化講演会「明石秋空」狩生徳義氏（共催）

十一月　毛利高政三五〇年祭講談会と展示会

○研修旅行　四月　鍋方町及び竹田市神原の文化財古跡めぐり

七月　作築市・日出町の城下町及び史跡めぐり

十月　二泊三日　西北九州の歴史と文化を訪ねる旅

○史談発行　四月　一〇八号（三四ページ）　七月　一〇九号（三二ページ）

九月　一一〇号（三二ページ）　十二月　一一一号（四六ページ）

○特別行事　四月　依伯招魂祭に桜苗五〇本植込み

十一月　日向長高知神社参拝

依伯推治公陣没四五〇年祭墓前慰霊祭

(二) 昭和五十二年度（一月―十二月）会計報告

項目	予算高	決算高	摘記
収入			
一 繰越金	八二、七八八	八二、七八八	前年度よりの繰越金
二 会員会費	三二〇、〇〇〇	二七五、五〇〇	普通会員会費179名
三 賛助寄付金	二五〇、〇〇〇	一四九、〇〇〇	賛助会員寄付金49名
四 補助金	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	依伯市より補助（二年分）
五 繰入金	三五、〇〇〇	三七、五〇〇	諸会席上会費等繰入
六 雑収入	三、〇〇〇	五、五五六	
計	七三〇、七八八	五九〇、三四四	
支出			
一 会議費	三〇、〇〇〇	二一、六二〇	役員会費（三回分）
二 研修会費	七〇、〇〇〇	八四、二〇〇	年間研修会諸費
三 雑費	六五、〇〇〇	五五、三〇〇	用紙、原紙、インキ代
四 郵送費	一〇〇、〇〇〇	八六、四一〇	会誌発行四回分